

Title	永澤先生を憶う
Sub Title	
Author	伊東, 乾(Itō, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1972
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.45, No.6 (1972. 6) ,p.129- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	永澤邦男先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19720615-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。何がこのような成長を齎したか。その重要な要素としては、潮田塾長の下において十年間常任理事の仕事を担当したことであると思う。この間私大連盟の副会長として他の私大の幹部と接触し、塾内外の仕事に貴重な経験を積んだのである。昭和四十年以来、四年間塾長としての重責を果たしたのも、その前の十年の修業が物を言つたものであらう。常任理事としての十年の苦勞が実を結んだことは、ある時私に告白したことがある。いづれにしても大した成長ぶりである。助手時代の同君を見ているもので誰がこのような政治家の成長を予想することができようか。私学の經常費に対し国庫助成を実現させたことも同君の顕著な功績の一つであらう。また昨年以來、私学振興財団の初代理事長として、財団を整備した功績も大きい。奥様も「永澤は政治家ですよ」と何度か言われたことを記憶している。私学経営が困難ですます国家の助成を必要とするときに、同君を失つたことは、私学のために大きな損失である。

永澤先生を憶う

伊 東 乾

陽春四月、この大切な先生の逝去に遇おうとは、夢にも予想しないことであつた。つい先頃お目にかかつた折には、例の、喉にからまる痰の音さえきれいに消えて、健康は上乘と語つて居られたのである。左右に強く張つた顎角、分厚すぎる程に分厚な眼鏡、ゲルベ・ソルテの紫の煙……。すべてが突如として消えた。とても信じ難いというそんな想いも、さすがに葬儀を了えてみると、やはりもう先生は居られないと確認され、やりきれないような諦めに変わつた。

先生によつて、私は、眠り込もうとしていた自分自身の或る一面を目覚めさせられ、小さく固まろうとしていた私自身を押し拡げられた。先生の厚知を蒙つたことは、私にとつて、まさに貴重な人生の出逢いであつたと思う。

初めて親しくお話を申上げたのは、もう三十年近くも昔にな

ろうか。被災後ひところ鶴ノ木の長屋にいた私は、当時その山の手の住宅地におられた先生と、目蒲線の電車でよくお目にかかった。駆け出しの助手が大先生とお話できるのは嬉しくもまた怖いような心持ちであつたが、しきりに、先生は、結果を焦らず、根をおろして勉強せよ、ということと言われた。学生時代にかがったあの重厚な御講義を忘れずにいた私の方からは、是非著書にして上梓して戴きたいという趣旨を、繰返し繰返し申上げたことを記憶している。実は、恰度その頃、先生は、深刻な苦悩を反芻しておられたのであつた。何度目かのお願いの後、とうとう、先生は、御自分の研究の、計画と進捗の状況とを語られた。宏模深遠なその意欲、一点一画を忽せにしないその良心、そうして、その頃までに既に払われた苦勞の大きさ、学者というのはこういうものかと初めて悟らされて私は息をつめた。その御研究の成果と資料とが、過般の戦争で灰燼に帰したのである。出版などは、もともと、どうでもよかつた。研究を原状に復するだけで新たに二十年は要するであろう。勿論、その先にこそ探査し究めたい問題がまだ山ほど待つてゐる。いまさら姿勢やテーマを転換することは良心が許さない。どうしたらよいか。先生の面持ちは、まことに沈痛であつた。私は、もう、何もいうことができなかった。

繼て、私は世田谷に移り、先生は潮田塾長を援けて学務理事

に出られた。固より、先生のこの転身は、潮田先生との友情が塾長の懇請を黙し難くしたためには違いがなかつたが、本当はその背景に御研究の被災がある。先生の学者的良心は、いい加減な条件のもとで仕事を再開し、言わば研究を装うことには到底耐えられなかつた。先生は、決然、御研究を捨てられたのである。だから、先生は、理事室と書齋と、両天秤をかけるような真似はせられなかつた。専ら、ただ、八年間を、学務理事の職務に没頭せられたのである。

唯でさえ世評の立ち難い法律学者が、先生のような巡り合わせに遇つた場合、その価値を知る人が少いのは無理もないことかも知れない。実は、先生は、塾中わずか数人の最高の学者の一人であつた。虚飾を捨てて先生に学問を語らせた者は、その偉大さを知つていた。その学者がどうして物を書かなかつたのか、学者ならばどうして半途で研究を捨てたか、詰問することとは洵に容易である。だが、学者の良心というものが、其処まで緊張したものでなければならぬということ、先生の良心がどんなに鋭ぎ澄まされたものであつたかということを知りえない者は、寧ろ自ら学問を知らない者と言われるべきであらう。勿論、テーマと方法の奈何も深く関わる所で、他のテーマ、他の方法であつたら、執筆も再起も充分可能なことであるが、先生にはその脱出口が絶たれていた。御自身では減多に語られな

いことであつたが、学務理事就任は、悲痛な転身を意味したのである。

当時、大学は大きな曲り角に立つていた。旧制大学から新制大学への切換えがそれである。それは広汎にして複雑な人事を含む、困難を極めた仕事であつたが、先生の手によつて、これは見事に成就された。この期間は、先生にとつて、文字どおり寢食を忘れる多忙の時期であつたので、私などのお目にかかる機会はなかつた。

長い理事づとめを了えて第二研究室に戻られた先生は、何を憶えておられてか、よく私に声をかけられた。君のいうことは何でも信用するよ、と言われて、私はコロリと参つた。何回か、一人だけでお伴をして、飲めないウィスキーを御馳走になりながら、塾内外の事情を逐一、教えて戴いた。帰途は必ずタクシーで送つて下さつたが、遅くなると車中で眠りこんでしまわれることもあつた。

間もなく、先生は法学部長に選出された。人事委員会の幹事を命じられた私は、命を受けて昇任人事基準を起草した。何をやつてもよろしい、責任は全部私が負う、と言われる先生の許でこそ、安んじて仕事のできたのである。私自身も、なるべく、個人の所見はいれず、大方の要望を掴むように心がけて草案を作成したが、草案上程の教回の教授会中一回は、全学重要

会議の關係で、先生は欠席せざるをえなかつたところ、予め人事委員長の前原先生の部屋を訪ねて、伊東を全面後援して傷つけないように、文句はあとで全部自分が引受けるからと、先生が頼んでおられた由を後から人伝てに聞いて、非常に感激した。

その後、すぐ、学部長の任期は半ばにして、ついに先生は塾長に選任された。陽のあたる場所でのこの四年間の事蹟は、広く人の知るところであるから、故らに筆を省く。私も、色々な形で御協力を申上げはしたが、先生が塾長らしくならなければ、なられるだけ、私からは遠くなつていくのを感じた。

但し、塾長らしくなられば、なられるだけ、とは言つても、それは、先生の関心方向の定着と多忙とを指すだけで、意識やスタイルを意味するのではない。およそ、教授ぶり、学部長ぶり、塾長ぶることほど、先生御自身のお嫌いなものはなかつた。入学や卒業の式辞さえも、言わばなりふり構わず、淡々としてやつてのけられた。スタイリストは、平素から、寧ろ、先生の嘲笑の的なのであつた。

教授時代から教授ぶらなかつた先生は、学生とも胸襟を開いて話をした。先生となら、学生は、人間として交わることができた。こちらは教師であるという意識や、教えて進ぜようという姿勢は、先生とは馴染みえないのであつた。私が最も惹かれ

たのも先生のこの点であつたが、卒業した友人のなかにも終始先生を慈父として慕いつづけた人がある。

その先生が、塾長として、一部に大變権力的な印象を与えたのは、それは先生が捨て身になられた為である。先生の塾長は、学務理事時代と同じく、片手間ではなく、兼職ではなかつた。のみならず、今度は、最後の御奉公という気持があつた。実は、先生は、そろそろ死期をひそかに仄びはじめておられる。騒乱の時に敢て塾長を引受けられたのは、そうして散りたいお氣持があつてのことであつた。私かに語られた所によれば、本當の最後の場面では、常任理事の一人さえも道連れにはしないと決めておられた。強くならなければ不思議であらう。

こうした強さに加えて、任期を完うし、而も仕事を多く成就された秘密は、思うに、先生の、人事の巧と、たぐい稀なネバリとにある。前者についていえば、何とも鮮かに適材を起用せられ、何とも見事に適所にこれを用いられる。先生から交渉をうけて、お断りできた人がないのも、また妙であつた。さりとて、これは、人を利用する、というのとは違ふ。蔭になる苦勞を避けて他に押しつけるのが利用であらう。先生は、正反對で、表に出ない雑件は、起用した人の分まで、コツコツ御自分としておられた。適材には適所の核心の場面で存分の活動をするこののみが期待せられていたのである。だから、人を登用す

ればするほど、先生は、楽になるところか、逆に事務的にさえ忙しくなられた。先生を慕う人は勿論多かつた。多くの人に囲まれながら全く人を利用しなかつた、そんな先生が私は耐まらなく好きである。後者、すなわち、ネバリの点についていえば、これは、郷土から恵まれた生まれつきの御資質ではあつたに違ひないが、流水の浸蝕に似た空恐しさがあつた。烏有に帰するまでのその昔の御研究が周到精緻を極めたのもネバリの成果であつたが、行政上も、先生のネバリの前には、あらゆる障礙がいつしか解消した。

塾長の任期を満了した先生には、疲れと空しさが一時に襲いかかつた。功績を素直に認めようとしないうきが意外にもすくなくなかつた所為もあるが、決してそればかりの事ではなかつた。先生の胸中には複雑な思いが去来し、氣力は急に衰えていかれた。だが、幸か不幸か、先生に充分な休養の時間は与えられなかつた。私学振興財団初代理事長の座が、先生をとらえて攫つて行つたからである。舞台に押し上げられた名優は不思議に變鍊を取戻し、瞳にも人を射る鋭さが蘇つた。私どもは、だから、安心しきつて、先生の上に不死を信仰した。

私は、いま、私自身が学部長を勤めた昨年の九月までの最近の二年間を、夢のように回想する。小さな風呂敷包みをかかえて、今は前塾長・名誉教授・財団理事長となられた先生が、ひ

よこひよこと、よく学部長室に私をお訪ね下さった。以前から先生は殆ど袍を用いられず、いつでも御自身の御持物は風呂敷に包んで抱えておられたのである。お邪魔しますとノックして入つて来られて、先生の御態度は極めて殷懃であつたが、これは今に始まつたことではなく、私が助手であつた目蒲電車の時分から変わらないことである。御報告申上げるまでもなく、何故か、先生は、学部に起こつてゐることをよく御承知であつたし、先生の方から特に用事を持つてこられたわけでもないの
で、何を話すでもない、ただ雑談をしては帰られるだけのことであつたが、御見舞下さる先生の御氣持が私には有難くて、先生が見ていて下さるという思いが、学部長時代の私を支える最も大きな張合いであつた。

財団も愈々軌道に乗り、先生の御仕事にも一そう腰が入つてきた折も折、海外出張の旅の空で急に先生は不帰の客となつた。あるいは、これは、鑾轡を取戻した名優に別離の六法を踏ませんがための、天の摂理であつたのかも知れぬ。あゝ永澤邦男先生。

—完—